

マーク・ブラキシル、ラルフ・エッカート 著「インビジブル・エッジ - その知財が勝敗を分ける - 」
文藝春秋 2010年10月15日刊を読む

インビジブル・エッジ - その知財が勝敗を分ける -

1. 独自の無形資産を持つ

名前でも、ソフトウェアのコードでも、発明でも、何でもいい。顧客に評価され、ライバルに差をつけるような無形資産を持たない限り、ビジネスで勝ち目はない。

2. グローバルに考え、ローカルに行動する

優秀なエグゼクティブでも、無形資産の財産権はローカルなものだということを知らないようだ。グローバルに効力があるのは著作権だけである。したがって、自社のブランドや発明の権利を全世界で保護したいのであれば、それぞれの国で権利を取得しなければならない。

3. 最も大切なものは権利で保護する

無形資産の価値はきわめて幅が大きく、一握りの資産が利益の大半を生み出すことはめずらしくない。

4. 未来の選択肢を確保する

戦略は、つねに不確実な未来を考えて立てるものである。将来の複数の選択肢それぞれに物的資本を投入するのはコストがかかりすぎるが、知財であれば比較的低いコストで幅広い選択肢を確保しておくことができる。

5. 規模の拡大に走らず知財の拡大にも努める

まったく新しい市場へ乗り出す会社は、知らずに他社の技術を侵害するとか、サメ企業に攻撃されて巨額のライセンス料をとられるといったリスクをつねに抱えている。

6. すべてに勝とうとせず、協力者を呼び込む

何事も手を広げすぎるとだいたいは失敗する。

7. 自分で作れないときは、買う

「自前主義」を捨て、他社が開発した企業に妥当な値段を払う方針をとれば、変化の速い市場で柔軟な対応が可能になる。

[コメント]

知財に関する最先端のテキストが日本語訳され出版された。知財に関する基本的な考え方を理解するには非常に有益な本と考える。

- 2010年10月19日 林 明夫記 -